

研究課題 (テーマ)	看護学生間でのロールプレイを用いた ケアコミュニケーション技術教育法の効果に関する情報学的検討		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部	教授	岡本 恵里
分担者	看護学部	教授	竹内 登美子
	看護学部	講師	青柳 寿弥
	工学部	教授	唐山 英明
	工学部	准教授	高野 博史
	工学部	講師	木下 史也
	東京医療センター	総合内科医長	本田 美和子
研究結果の概要			
<p>【目的】本研究の目的は、看護学生間でのロールプレイを用いた「ケアコミュニケーション技術教育法」の効果を検証することである。</p> <p>【背景】若者のコミュニケーション能力の低下が危惧されている今日、看護学部では質の高い看護専門職になるための教育として、世界に先駆け「ケアコミュニケーション技術教育 (ユマニチュード®)」を教育課程に組み込んでいる。本授業の教育プログラムを通し、受講した学生らが、どのようにコミュニケーション能力を獲得しているのかを把握し、今後の教育に活用する。</p> <p>【対象】看護専門科目 (必修科目) である「看護ケアとユマニチュードⅠ,Ⅱ」を受講する1,2年生の中で、研究への不参加の意思のない学生とした。</p> <p>【方法】令和2年度はCOVID-19により学生の大学キャンパスへの入校が禁じられ、情報学的データを収集する実験を実施することができなかった。そのため、遠隔で行われた授業後に提出されたレポートを対象とした評価研究を実施した。分析対象としたレポートは、①授業終了後に提出した「最も学びを深めることができたと感じる事柄に関する自分の考え」の記述内容4日間分、②「この授業における自分の目標を踏まえた、4日間の学びと今後の課題」の記述内容であった。</p> <p>【分析】テキストマイニング法および質的記述的分析法によって、学びの構造の特徴に関する情報を抽出し分析した。</p> <p>【結果】1年次生：レポート①では、ケアを受けた対象者の反応の変化を捉え、それに対して「衝撃、驚き、漠然とすごい、心が繋がる」等、感化された記述に特徴が現れていた。レポート②では、ユマニチュードのケアの基本である【見る・話す・触れる】の技術的な記述よりも、「安心、快楽、信頼、安らぎ」等の感情や、ユマニチュードの哲学に関わる記述が上回っていた。</p> <p>2年次生：レポート①では、授業の内容を踏まえて看護職を目指す者としての自分の行動や考え方を示す記述や、ユマニチュードの考え方や技法に対する疑問を記述する傾向が見られた。レポート②では、自身の臨地実習での経験や、今日の感染対策に伴う対人関係の弊害から捉えた学びを記述したり、今後の自己目標や課題に関わる記述がなされていた。</p>			
今後の展開			
2年次生のレポートと同学生が昨年度 (1年次) に記述したレポートとの比較、2年次生が1年次に提出したレポートと今年度の1年次生のレポートとの比較分析を進める予定である。			